その者、取扱い注意。

黒三葉サンダー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼馴染みの恋を叶える為、恋路を邪魔する奴を妨害しつつ日常を謳歌する風間　幸太郎。しかしその日常は突如現れた魔方陣によって崩壊した！

異世界転移!?俺らが勇者パーティ!?うるせぇ！そんなことより香織の恋路だバカ野郎!!

良かれと思って大暴走！幸太郎の運命はいかに!?

目　次

これが伝説の始まり（大嘘）――――――――1
飯食ってんだ。邪魔すんな！――――――――6
今日は風が騒がしいな……吹いてないけど。――――――――12

これが伝説の始まり（大嘘）

月曜日。それは学生にとって憂鬱な曜日であり、最もやる気が出ない日である。

特に土日にはっちゃけた奴がよりいっそうグータラになる恐ろしい日だ。まさに神が俺たちに科した試練と言っても間違いない。

つまり俺が現在進行形で走っているのも、そもそも残り五分で遅刻判定になってしまうのも、途中で弁当を家に忘れてきたことを思い出したのも全ては試練。

要するに神さまが全部悪いのだ。

「うぉぉぉぉぉぉ!!」

しかし神さまからすればそれは俺のあまりにも身勝手な自己解釈としか見られまい。

口惜しや。何故俺は寝坊してしまったのか。

いや、それは紛うことなき自業自得。人は睡魔に抗えぬのだ。

近年稀に見るトップアスリートの如き速度で走れば、もう既に校門が目と鼻の先であった。

その狭き門を閉じようと今まさに手をつけ始めた教育指導の先生。言うなれば我が校の門番が俺の行くべき道を閉ざそうとしていた。

かの先生はその屈強な肉体のおかげで門を閉じるスピードが非常に早い。そのＳＡＳＵＫＥの如く鍛えられた肉体は決して飾りなどではないのだ。

（いけん！駄目だ！間に合わない！）

走りながらも俺の額をツーッと冷や汗が流れる。決死の表情で先生を見やれば、また先生もこちらへとその視線を動かした。かの先生との出会いから早二年。最早俺と先生の間に言葉など不要。視線が合うだけで思いは通ずるのだ。

校門突入まで、あと五秒。

『先生！後生だから五秒待ってください！』

『ようやく来たか風間。だが遅刻だ』

確かに思いは通じ合った。それだけは間違いない。

しかしその門は先生の悪い笑みと共に固く閉じられた。
やはりどこまでいっても先生は無情であった。
風間　幸太郎。全力疾走も虚しく、遅刻の烙印を回避出来ず教育指導室へと連行される。
遅刻回数、本日を持って二桁へ突入するとのこと。

▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼

「――なんてことがあったんだとよ」
「他人事みたいに言ってるけど、それ風間くんの事だよね」
時は変わって昼休み。
ＳＡＳＵＫＥ先生に熱血指導をされた俺は隣の席で１０秒チャージを終えた友人と気ままに駄弁りあっていた。
その間僅か三分。駄弁り量が少なすぎて泣けてくるぜ。
そんな無駄しかない会話の最中に感じる視線にチラッと目を向ければ、今か今かとチャンスを伺う幼馴染み１号の姿が。２号はあいも変わらずイケメン力をキンキラにばら蒔いており、３号は１号の様子に苦笑いしている。
（おーけおーけ、任せとけよ１号。お前の出番はもうすぐ来るからな。スタンバっておけよ）
我が友人の南雲ハジメくんはこの後に起きるであろう厄介事を回避するためか俺を置いて眠りにつこうとするが、それは１号の為に断じて阻止させてもらうぞ！
「おや？南雲くんよ。まさか昼飯はそれだけというのかね？」
「え？そうだけど……」
「それはいけない！いくら徹夜明けとはいえ飯はしっかり食わんといけんよ！良ければ俺の分を――」
俺の道化っぷりに何やら勘づき始めた南雲くん。しかしながら君のターンは終了だ！
さぁ行け！対南雲用必殺少女よ!!その手に持った二つの包みを――
――ん？二つ？

「南雲くん！それだけじゃ足りないでしょ？私のお弁当分けてあげるね！」
「白崎さん……いいよ。僕はこれで足りるし、白崎さんに悪いよ」
「大丈夫！ちょっと作りすぎちゃったから、南雲くんに食べてほしいの。あ、幸太郎くんの分もあるよ！」
「へぁ!?」
　かおりぃぃぃ!?何をしているぅぅ!?ここは余計なモブである俺にまで弁当を用意する場面ではないぞぉぉぉぉ!?
　それじゃあ南雲くんへの特別感が薄れるではないか！幼馴染みの俺の分を作った余りみたいになるじゃないか！
　それに俺には南雲くんとは違い立派なお弁当さまが……ない!!
　そうだ！我が家のリビングに置きっぱではないか!!
「幸太郎くん、また遅刻してたよね。幸太郎くんが遅刻する日は大体お弁当忘れてくるもんね」
「ば、バレてーら……」
　我らが大天使カオリエルにはバレバレであったらしい。
　もう何度目か分からんけど、俺遅刻しないようにするわ。俺が遅刻すればその分だけかおりの南雲攻略が遅れてしまう。
　そして俺という妨害札が正常に機能しないと、奴が……幼馴染み２号が来る。
「香織、幸太郎。こっちで一緒に食べよう。どうやら南雲はまだ寝足りないらしいしさ。それに香織の美味しい手料理を寝ぼけたまま食べるなんて俺が許さないよ？」
「ア〃ァ〃ァ〃ァ〃ァ〃ァ〃」
「幸太郎……ごめん。止められなかったわ」
　なんでなんでなんでぇぇ!?どうして俺の仕事を増やすんだ２号ぉぉぉぉ!!お前じゃカオリエルは無理なんだよぉぉぉぉ!!
「え？どうして光輝くんの許しがいるの？」
　ほーれ見ろぉ！ド天然な1号にそんな気障な台詞は全然効かないし、何よりもう既にお前は対象になってないんだよぉぉ！カオリエルが選んだのは南雲くんなんだよ!!

しかも3号がコソッと後ろで笑ってるぞ！龍太郎も何とも言えねぇ顔になってるし！
「かゆ……うま……」
「こんな時によく食べれるわね」
「1号の飯は昔からうまいから無意識にな……」
「そ、そう。ち、ちなみにその卵焼きとかどう？」
「おん？そりゃうまいぞ。なんか味が少し違う気もしなくないけど」
「っ！……良かった……」
「「チッ……」」
いつの間にか側に寄ってきていた雫の質問に答えただけで南雲くんやイツメンを除いた野郎どもから舌打ちをされた件。あんだぁテメーら？さてはカオリエルの飯が目的だな？これは俺んだ、誰にも渡さねぇぞ！
南雲くんは別だけどなぁ!!
しかしカオリエルは何故そんなにニコニコとしてらっしゃるん？なに？この弁当になにか盛った？普段だらしない俺に対する報復的なイタズラでも施した？
「あのね、幸太郎くん。その卵焼きなんだけどね」
「つ、次は何をした？」
「もう、私は今回何も入れてないよ！実はその卵焼きは雫ちゃんが――」
「わぁぁ！香織！」
「まさか……お前か幼馴染み3号！」
ビシッと指差し確認をしてやればビクッ！と反応を返す3号。ふっ、あまちゃんが！堂々としてりゃお前が何かしたかなんて思わなかったのによぉ！
そして突如現れる目映い光を放つ魔方陣的な何か。
……ｗｈａｔ？
「なに!?幸太郎！」
「っ!?離れるなよ雫！」
皆が驚き戸惑う中、迷わず雫の手を掴んで引き寄せる。

するとほぼ同時に魔方陣が強く光り、俺の視界は真っ白になった。

飯食ってんだ。邪魔すんな！

目映い光が収まっていき、恐る恐る目を開くと知らないドーム状の天井だった。そして右手には何やら柔らかくてスベスベした感触。左手には弁当箱と箸。

「知らない天井だ……」

「なんで天井見てるのよ！前見て！前！」

「前？そうかこっち上だわ」

雫の言葉に従って顔を前に向けると、言葉にし難い光景が視界に飛び込んできた。

それは巨大な壁画だ。なんかいろんな景色とか金髪外人が書かれてるが、俺には一番気になることがある。

「なぁ雫。あの絵って女性かな？まさか野郎じゃないよな」

「そこ!?今気になるのがそこなの!?」

「気になるじゃん。気にならない？」

「それは……少しだけ」

「だろ？」

「あのー、そろそろよろしいですかな？」

俺たちの足下から声が聞こえ、視線を今度は下に向けると何やら俺たちは知らねぇおっさんたちに囲まれていた!!

思わずまだ掴んでた手を引っ張って雫を俺の側に寄せ、あからさまな警戒心を出してやる。流石の俺も知らない奴らに囲まれてる状況なら雫優先するわ。

1号？1号なら既に然り気無く南雲くんの側に寄ってるよ。こんな状況でもさらっと想い人の側に近付けるってやるおるな。

やっぱすげぇよ、1号は。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシュタル・ランゴバルドと申す者。以後、よろしくお願い致しますぞ」

何やら一番豪華そうな装備を施した好爺っぽい人が名乗りを上げる。

あぁん？教会？教皇？ははーん。なるほど。分かったぞ！
教会でステンドガラスに描かれているのは大半が女性！
つまり！
「雫、この絵は高確率で女性だ……!!」
「幸太郎……ちょっとは空気呼んで……」
「「「確かに」」」
顔を赤くした雫の言葉に、クラスメイトどころかおっさんたちまで頷いたのはとても解せん。
その後、俺たちはイシュタルなる人物に教会の外へと連れ出されたのだった。
何度でも言おう。解せん！

▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽

場所は変わって、なんぞ豪華でデカイ部屋に案内されたでござる。イシュタルや愛ちゃん先生、幼馴染みズが上座に座っており、やっぱこいつら勇者パーティの主力なんやなぁってボーッとしとります。
俺？長テーブルの最後方、南雲くんの隣だけど。
どうして自分から目立ちにいく必要があるんです？（マジレス）
でもさらっと3号に睨まれました。1号にも睨まれました。3号は「一人だけ逃げるな」、1号は「南雲くんの隣はズルい」ってことを言いたいんですね分かります。
……俺は勇者側じゃないからね！仕方ないね！
「……」ペコリ
「あ、どうも。お仕事お疲れ様です」
「……」ニコッ
飲み物の支給をしてくれたメイドさんにお礼を言うと、愛想笑いをしていってくれた。
うーむ。愛想笑いだと分かっていても可愛い。野郎の悲しい性。
南雲くんにも同意を求めようと思ったけど、1号がニッコニコしながら南雲くん見てるから止めといてあげよう。風間　幸太郎は空気を

読める男だ。
え？俺に来る3号の視線？でぇじょうぶだ。今のところは問題ない。ええ、今のところは。
因みに他の野郎どもはデレデレしおってからに女子から冷たい眼差しを受けていた。俺にも冷たい眼差しが来てたけどそいつらには満面の笑みを浮かべながら手を振って差し上げた。顔反らされたけど。解せぬ。俺が何をしたというのか。
「さて、あなた方においてはさぞ混乱していることでしょう。一から説明させて頂きますのでな、まずは私の話を最後までお聞き下され――」
この後延々と胡散臭いじいさんの話が続いていくが、どうせ南雲くんとか幼馴染みズがしっかり聞いてくれるだろうし俺はお昼の続きを取ることにした。幸いにも弁当はそのまま持ってたので一安心だ。
お、このアスパラベーコンの塩加減ええやん。流石カオリエル、俺の味覚を分かってらっしゃる。にしてもこの卵焼きの味も食ってると中々に中毒性がある。甘しょっぱい味付けがいいね。
でもあれだな。この状況って十中八九元の世界に返してくれないパターンが多いよね。
ってことはこんな風に日本の飯が食えるのもこれが最後ということか……。
ちょっとしんみりしながらおかずを口に運んでいると、周りからの視線がチラホラと俺に向いていることが分かる。なんだよ。君らちゃんと食ってたでしょ。
うーん、これメイドさんに頼んで似たような料理とか出来ないかね？
「……」チラッ
「？」コテン
「ｏｈ…」
先程支給をしてくれたメイドさんを見れば、愛想笑いをしながら小首を傾げた。うーん、可愛い。控え目にいって最高としか言えな――

ピシャアアアアン!!
その時俺の背に電流走る！その原因は今まさに此方をガン見している3号である！少し前の1号並みにニコニコしている。俺はこの話し合いの後に死ぬかもしれない。せめて死ぬ前に美少女か美女に膝枕してほしい人生だった。
「ふざけないで下さい！結局この子達に戦争させようってことでしょ！そんなの許しません！ええ、先生は絶対に許しませんよ！私達を早く帰して下さい！きっとご家族も心配しているはずです！あなた達のしていることはただの誘拐ですよ！」
「ファッ!?」
愛ちゃん先生が怒り心頭で立ち上がり猛然と抗議を始めたのでマジでビビって変な声が出たぜ……。
ってか何？戦争？いつの間にそんな話が進んでた訳？
あの優しいロリ先生を本気で怒らせるなんざぁやべぇ奴らやで。
あ、メイドさん止めて。そんなクスクス笑わないで。流石の俺も恥ずかしいぞい！
「お気持ちはお察しします。しかし……あなた方の帰還は現状では不可能です」
「なっ!?」
イシュタルの言葉に愛ちゃん先生とクラスメイトたちが動揺するが、何やら隣の南雲くんだけは油断せずに相手を観察している、風に見えなくもない。
「ふ、不可能って……ど、どういうことですか!? 喚べたのなら帰せるでしょう!?」
「先ほど言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意思次第ということですな」
「そんな……」
イシュタルの無情な言葉にショックを隠せない愛ちゃん先生の姿に加え、帰れないという事実が皆に重くのしかかる。
そして勿論それだけで済む筈もない。

「うそだろ？　帰れないってなんだよ！」
「いやよ！　なんでもいいから帰してよ！」
「戦争なんて冗談じゃねぇ！　ふざけんなよ！」
「なんで、なんで、なんで……」
「そーだそーだー、おーぼーだー」
　知らない土地にいきなり飛ばされて、知らないうちに勇者パーティに仕立てられ、しかも帰れませんだもの。
　こんなんキレるのも仕方ない。かくいう俺も今頃我が家でつくだ煮を作ってるであろう婆ちゃんのことが心配だ。
　だがここで騒いだところで解決なんてするわけも、俺たちを帰してくれるわけでもないだろう。
　ほぅれ見ろ。イシュタルのあの冷えきった瞳。ありゃ、ろくでなしの瞳だ。じっくりこっちを観察してやがる。
　あ、因みに最後の台詞は俺です。
　にしてもそろそろあれだ。我らがイケメン枠、２号が動き出すな。んで２号は良くも悪くもお人好しだ。そりゃもうご都合全開でだ。いやーキツいっす。しかも聞いた限りじゃこれ、人類救済系の戦争っしょ？
　勇者様！魔王を倒して人類を救って下さいまし！的な。
　いやー本当にキツいっす。何が一番キツいって、これ２号がやらかすな。そこに関しては圧倒的信頼があるぞ。
　そしてその予想は見事に的中してしまう。
「皆、ここでイシュタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシュタルさん？　どうですか？」
「そうですな。エヒト様も救世主の願いを無下にはしますまい」
「俺達には大きな力があるんですよね？ここに来てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうです。ざっとこの世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」
「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」
はい!!終わり!!閉廷!!解散!!
もぉぉぉやだぁぁぁぁぁこいつぁぁぁぁぁぁぁ!!
心の中で大泣きしながらも、冷めてしまったハンバーグを口に運んだのだった。
悲報、俺ら戦争から逃れられない模様。

今日は風が騒がしいな……吹いてないけど。

なんだろう。何故だろうか。

目の前の光景にギリギリと歯軋りをしてしまう程には感情が荒ぶっている。

「何故……俺はこんなものを見せられている……!!」

「お、落ち着いて風間くん。ステイステイ」

俺の豹変にギョッとした南雲くんが俺を宥めようとするが、すまんな。この光景は俺には目の毒なのだ。

だから止めてくれるな、我が友よ。

あぁ！何故！何故なんだ！

「何故ジジイとおっさんのキスシーンを見せられねばならぬのだ……!!」

「「「ブフッ！」」」

イシュタルの手に王様がキス（偏見）をしているのだ！

今一度問おう!!

何が悲しくてジジイとおっさんのキスシーン（誤解）を見せられなければならぬのだ!!

俺の声は静かに、されど怒りに満ち震えていた。その声はどうやら南雲くん含め近くにいたクラスメイトたちにも聞こえていたらしく、殆どの奴らが顔を反らして吹き出した。

ふむ。俺の発言に変な妄想でも成り立ったか。だが俺は謝らない。美女とイケメンの絡みならともかく、ジジイとおっさんで再現しても吐き気が込み上げるだけである。

幸いにもイシュタル含めた王族の方々には聞こえていなかった。

あん？その後？なんのこともない、ただの自己紹介タァイムよ。

王様のヒドラーさんと王妃のルルイエさん、王子のシャンデラさんに王女のリリーラさんです（大嘘）。

まぁどうせあんまり関わることは無いだろうし、関わるとしてもガッツリ猫被ればいい。

なんの問題ですか？なんの問題もないね！

因みに一番警戒しなければならんっぽい奴は王子でした。なんやあいつ、1号に釘付けやんけ！

何見てんだよ！1号は南雲くんのやぞ!!

王女？ありゃ2号見てるよ、うん。決して俺を見てる訳ではない。俺と被るような位置にいるから勘違いしやすいが、モブである俺を見る必要皆無だからね。

……こっわ。気配消しとこ。

その後、晩餐会が開かれ皆が異世界料理に舌鼓を打つ中。俺は一人バルコニーにて誰にもバレないようにひっそりと息を潜めて星を眺めていた。

んやー、異世界言うても星空は綺麗だかんねー。

……流石の俺もふざけてばかりいないで腹決めとかんといけん。向こうでも欠かさず鍛練はしてたが、戦争とは縁遠い日本でこんな技術を覚える必要はないって思ってたんだけどなぁ。

かおりと同じように、一般家庭で育って、普通に出会って、恋をして。何度も憧れて、夢想した。

「でも、これで良かったんだよな」

そうだ。この人生に絶対に価値はある。俺がやられてきた時代錯誤な躾だって、あいつの力になれる。

俺じゃダメだ。お姫様の相手はたったの一人。

なら俺はその幸せを得るための手伝いをする。

それでお前が幸せになれるのなら。

（……二人だけでも、必ず元の世界へ。たとえそれが無理でも、お前の幸せだけは必ず……はっ!?）

珍しく人がしんみりとしてると言うのに、何やら此方へと接近する人の気配。この気配は先程感じたもの！

リリーラ王女!!貴様！来ているな!?

俺の直感が出会ったら面倒なことが起きると警報をならしているので素早くヘリへ。

そして迷わず飛び越えてエルード!!

「――――？」
しばらく足音が聞こえていたが、数分後には遠ざかっていったので少し頭を出してチェック――――
「えっ？幸太郎？」
「むむ？雫か――――」
どうやら入れ替りで3号がこっちに来てたらしい。少し気を抜いてしまったせいか気付かんかった。
さてさて。ここで考えてみてほしい。俺たちは未だ飛ばされた時のままの格好、つまり学生服な訳だ。
そして女子は勿論スカート。
次に考えてほしいのは俺たちの立ち位置だ。
俺はエルードの復帰途中故に3号を見上げるように、対して3号は下から突如現れた俺を見てる為に視線を下に向けている。
つまり。今俺の目の前に絶景が広がっている。
無論それに気付かないほど3号は鈍くはない。故に俺の中でこの絶景を脳内シャッターで高速百連写する。
みるみると面白いくらい赤くなっていく3号の顔に、徐々に近付いてくるタイムリミット。今の俺には抗う手段は、ない。
「……お粗末!!」
「っ!!!!見るな馬鹿ぁぁぁ!!」
「グワーッ!!」
この夜、王宮の外で憐れな男の悲鳴が星空に響いたのだった。
あ、与えられた部屋はとても豪華で寝心地良かったです。

▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽▼▽

しっかりと昨日の絶景が記憶内フォルダに保存されていることを確認し、朝から欠伸を噛み殺しながらメルド団長なる人物の話を聞いていた。

メルド団長は話してみると中々にラフな部分があると言うか、豪快と言うべきか。いやはや話していて楽しい人物で好感が持てるぞい。
因みに昨日3号にぶっ飛ばされて落ちた俺を救助してくれたのは団長だったりする。
メルドさーん！メルドさーんありがとー！メルドさーん！
「よし、全員に配り終わったな？このプレートはステータスプレートと呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな。失くすなよ？……あとそこ、プレートで遊ぶな！」
「うぇい!?」
さっき渡されたシルバープレートを投げて遊んでいたら怒られたでござる。
にしてもこれが身分証とな？しかも迷子お助け機能つき。……こいつもしやＧＰＳでも仕掛けられてんの？
「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。〝ステータスオープン〟と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くなよ？そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」
「アー「だんちょー！アーティファクトとはなにかねー!?」……幸太郎」
ふっ、2号。お前の発言タイミングは把握してんだよ。
この前の意趣返しだこのやろう!!
「お前ら……ん、んん。アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。まだ神やその眷属達が地上にいた神代に創られたと言われている。そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだ。普通は、アーティファクトと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。身分証に便利だからな」

「だってよミツテル」
「光輝だ！幸太郎は真面目に聞かないか！」
「ＨＡＨＡＨＡ！」
　俺の軽い態度に顔をしかめた2号に怒られるが、無駄だ！
　お前のお説教はこの俺には通用しない！お前じゃあ俺を止めるには役不足なんだよミツテルぅぅぅ！
「幸太郎くん？」
「すんません。マジで勘弁してください」
　ニッコリ可愛らしく笑う1号に背筋が凍る。
　ははは。俺は1号には敵わないんや、昔からほんとに。
　俺は素早く1号へと平伏したのだった。
「あー、取り敢えずステータスプレートに血を垂らしてもらってもいいか？」
「ｓｉｒ！ｙｅｓ　ｓｉｒ！」
「いやちょっと待て！針を用意――」
　メルド団長の指示に従い犬歯で親指を軽く噛みきり、指先からプックリと見慣れた赤い血が溢れる。
　それをプレートに押し付けると、プレートが淡く光だし、何やら文字や数字が表れた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

風間　幸太郎　１7歳　男　レベル：1
天職　：忍
筋力：８０
体力：１２０
耐性：１２０
敏捷：１８０
魔力：１８０
魔耐：２０

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

技能：
風魔法適性・巻物作成・鎌術・剣術・体術・隠形・毒耐性・麻痺耐性・痛覚軽減・挑発・魔力操作・言語理解
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　はぁん? なぁにこれぇ? 判断素材無さすぎて良いのかそうでも無いんか分からんぞ。もっと親切設計にしろ!
「はぁ、幸太郎。針を使えと言ったろう。全員見れたな? 説明するぞ? まず、最初に〝レベル〟があるだろう? それは各ステータスの上昇と共に上がる。上限は１００でそれがその人間の限界を示す。つまりレベルは、その人間が到達できる領域の現在値を示していると思ってくれ。レベル１００ということは、人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだからな。そんな奴はそうそういない」
　おんおん? つまりレベルが上がったからステータスが上がるって訳じゃないと言うことかい旦那。
「ステータスは日々の鍛錬で当然上昇するし、魔法や魔法具で上昇させることもできる。また、魔力の高い者は自然と他のステータスも高くなる。詳しいことはわかっていないが、魔力が身体のスペックを無意識に補助しているのではないかと考えられている。それと、後でお前等用に装備を選んでもらうから楽しみにしておけ。なにせ救国の勇者御一行だからな。国の宝物庫大開放だぞ!」
　うぇ……まぁだ鍛錬ですよクォレハ。にしても魔力でスペックが上がるとな。ははん? さては気功だなオメー?
　俺は詳しいんだ! 嫌でもな!
「次に〝天職〟ってのがあるだろう? それは言うなれば〝才能〟だ。末尾にある〝技能〟と連動していて、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。天職持ちは少ない。戦闘系天職と非戦系天職に分類されるんだが、戦闘系は千人に一人、ものによっちゃぁ万人に一人の割合だ。非戦系も少ないと言えば少ないが……百人に一人はい

るな。十人に一人という珍しくないものも結構ある。生産職は持っている奴が多いな」
「ＨＥＹ！団長！転職を希望だぜ!!」
「それは出来ない！お前はその才能で満足しろ！」
ｏｈ……団長辛辣ぅ……。
確かにこれ以上の職は無いけどよぉ……。
でもどうせならもっと面白そうな天職が良かったぜ。
「後は……各ステータスは見たままだ。大体レベル１の平均は１０くらいだな。まぁ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！全く羨ましい限りだ！あ、ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容の参考にしなきゃならんからな」
ファッ!?そんなに高いん!?現地人のスペック低すぎぃ！いや俺らのスペック高すぎ……!?
他のクラスメイトたちも浮足立ってるのが見え見えだが、ただ一人。
南雲くんだけが顔を青くしているのを発見した。
ま、まさか南雲くん……お前……！
（ＨＥＹ！南雲くん。もしかしてお前…）
（か、風間くん……。僕、ステータスが全部１０、なんだけど……）
（アイエエ…）
そっと小声で南雲くんに確認を取ると、案の定だった。
おい神様よぉ！そんなに南雲くんが嫌いか!?ええ!?
南雲くんは良い奴なんだぞ！俺みたいなやべぇ奴ともコミュニケーションしっかり取ってくれる優しい奴なんだぞぉ!?
あ、言ってて悲しくなってきたわ。
「ほお～、流石勇者様だな。レベル１で既に三桁か……技能も普通は二つ三つなんだがな……規格外な奴め！　頼もしい限りだ！」
「いや～、あはは……」
メルド団長の褒める声とミツテルの嬉しそうな照れ声。
ちっ！やっぱりあいつはチートだったか！スペックを確認してなかったから詳しくは分からんがあのイケメン野郎のことだ。チート

じゃない筈がない！
　ま、不味いぞ。さっき団長はステータスプレートの内容は報告しろと言っていた。南雲くんのスペックは現地人と同レベル！他の奴らのスペックを見てから南雲くんのスペックを見たら顔に出ること必至!!
　そうなればこれ幸いと檜山たちが晒し上げてくるのは必然！
「じゃあ次は――――」
「俺がいくぜ!!」
　南雲くんの晒し上げは1号が悲しみ、傷付くだろう。
　そしてミツテルはそれを庇おうとはしない。
　俺はそれを許容出来る程腐っちゃいない。
「どれどれ――――」
「メルド団長」
　ステータスプレートを渡しながら、たった一言。
「南雲くんのこと、くれぐれもお願いしますよ」
「……っ！」
　晒し上げるようなことをすれば、ただでは済まさない。
　暗にこう告げた俺の言葉は、表情を固くした団長を見れば正しく伝わったことが分かる。
「……分かった。善処しよう。にしてもお前も凄いステータスだな。総合でいえば勇者より高いが、極端に魔耐が低いのが気になるな。だが何よりもこの魔力操作という技能だ。これは魔物や魔族が保有する技能で、我々人間では保有出来ない技能の筈だが……」
　ステータスプレートを受け取って戻ろうとすると、団長にそんなことを言われた。心当たりが無くもないのがつらたん。
「あー、そりゃあってもおかしく無いかもですね」
「なに？」
「だって俺の一族は、風の悪魔に憑かれてますから」
　そのまま踵を返して、歩き出す。その時に不敵な笑みを浮かべるのも忘れない。

ふっ！決まった！